

## 文章における接続詞

柏木成章

### On Conjunctions in Texts

Shigeaki Kashiwagi

- 1 題目 文章における接続詞
- 2 氏名 柏木成章
- 3 英文題名 On Conjunctions in Texts
- 4 ローマ字氏名 Shigeaki Kashiwagi
- 5 要旨 接続詞の本質と機能を、特に文章におけるその使用実態から、種々の観点により検討する。
- 7 本文

#### I

接続詞の研究については、とりあえず、少なくとも次の五つの観点を設定しうるであろう。すなわち、以下のようなものである。

- 1 接続詞それ自体の機能及び分類
- 2 「零」 || 接続詞が用いられない場合と用いられる場合の対比とその意味
- 3 各個別接続詞、特に類義のそれ(例:「しかし」と「だが」と「が」等における相互の異同)

#### 4 接続詞と接続助詞の差異

#### 5 接続詞と副詞の差異

本稿では右五つの観点（これらは勿論、相互に密接に関連しているが）を念頭に置き、若干のテキスト（＝文章）における接続詞の使用実態の調査を通じてこれらの問題を検討することとしたい。調査に用いた主な文章資料は左の六点である。（この他、必要に応じ、他の資料をも用いる。）

A 『カレールイスの誕生』、小菅桂子著、講談社選書メチエ、二〇〇二年六月刊。

B 『路面電車の基礎知識』、谷川一巳・西村慶明・水野良太郎著、イカロス出版、一九九九年八月刊。

C 『戦略・戦術でわかる太平洋戦争』、太平洋戦争研究会編著、日本文芸社、二〇〇二年八月刊。

D 『旅でもらったその一言』、渡辺文雄著、岩波現代文庫、二〇〇二年九月刊。

E 『イニユイック（生命）』、星野道夫著、新潮文庫、一九九八年七月刊。

F 『一色一生』、志村ふくみ著、講談社文芸文庫、一九九四年一月刊。

右六点は勿論任意に選んだものであるが、なるべく一般的な文章をとということで、故意にフィクション類、ルポルタージュ類は外してある。また各資料の内容も任意に種々の領域のものをとり上げ、刊行年もほぼここ数年以内のものに限った。いずれにせよ極めて限られた分量の資料に過ぎず、この点に大きな制約と限界が存することは自ら認めざるを得ないが、この点を戒心しつつ、少しでも接続詞の一般理論に寄与することができれば幸いであると考え。以下用例の引用は「資料A：カ106」のように記号と略号で示す。例文末尾の洋数字は掲載頁を示す。

## II

右六点の資料を通じての極めて顕著な現象は、「そして」と「しかし」の頻用である。「資料A：カ」においては、「そして」25例、「しかし」34例、「資料B：路」においては、「そして」45例、「しかし」59例、「資料C：太」においては、「そして」30例、「しかし」63例、「資料D：旅」においては、「そして」71例、「しかし」11例、「資料E：イ」においては、「そして」81例、「しかし」33例、「資料F：一」においては、「そして」21例、「しかし」62例を数える。（なおここでは調査の目的上、他文献の引用部分、いわゆる会話文の部分等は対象としていない。）また資料Fにおいては「併し」と表記されている例をも含めてある。）

右用例数（の多さ）から窺えるように、この二つは一般に接続詞中最多の頻度で資料中に現れる。右の結果のうち、一見してまずやや不審なのは「資料D：旅」の「しかし」の用例数が相対的に極めて少なく（「資料E：イ」も同傾向）、「資料F：一」の「そして」が同様の傾向を有する

点であるが、これは左の事情による。

まず「資料D・旅」であるが、ここでは実は、「逆接」として類義の「だが」が27例を占め、いわば「しかし」の役を大幅に代行しているのである。（「しかし」と「だが」を加えれば38例となる。）また「資料E・イ」には「が」15例、「けれども」9例等が見え、「しかし」にこの二者を加えると57例となる。（それでも「そして」の方がずっと多いのがこれらD・Eの特徴であるがその点は後述。）「資料F・一」には先の場合同様、「累加」の類義語としての「また」21例（先と同様、「又」の表記例も含む。）が見え、これが「そして」を補っているかに見える。（両者計42例。）結局通覧すると、D・Eを除き、四つの資料で「しかし」が最も多く、そして「そして」がそれに次いで用いられ、D・Eはそれが「逆接」して「そして」が最も多く用いられているという結果になる。そして容易に推察されるように、D・Eは他4資料と異なり、特定の対象を論述・解説する（Aでは「カレライス」、Bでは「路面電車」、Cでは「太平洋戦争」、Fでは「染織」）底のものではなく、ともども広義の「紀行文」のジャンルに収容さるべきものであるという点が右差異をもたらす根本要因となっているのであろうと考えられる。以下では右の調査結果の示唆する点をさらに検討することとしたい。

### Ⅲ

いったい、「しかし」のような「逆接」系、「そして」のような「累加」系の接続詞が最も大量に用いられるということ自体がひとつの興味深い現象である。接続詞がこれらに尽きるものでないことは当然であるが、現実のこれらの現象は接続詞の主要な使用意図を暗示し、ひいてはそれに基づき接続詞のひとつの分類＝把握法をも示唆するであろう。筆者はここで、右「逆接」系・「累加」系の大量使用という現象に基づきひとつの徹底的に抽象的分類モデルを提示したい。すなわち、接続詞に関わる一切の機能を根本的に「同一化」と「異化」の二つに分ける。右の例に即すれば「累加」系が「同一化」、「逆接」系が「異化」であることは言うまでもない。いわゆる「順接」系、「だから」・「したがって」等もまた「同一化」に属する。また、「同列」・「解説」系の「つまり」・「たとえば」・「なぜなら」等も同様である。これに対し、「さて」・「ところで」・「では」等の「転換」系は「異化」に属する。すなわち、「同一化」には大きく「累加」・「順接」・「同列」・「解説」各系が含まれ、「異化」には「逆接」・「転換」等が含まれることとなる。要するに、文章における接続詞の機能は、「しかし」・「そして」の大量使用に象徴されるところの「同一化」と「異化」の作用を根本とし、その下位的機能として各種の「同一化」と各種の「異化」があると考えるのである。逆にいえば一般に文章は、右「同一化」と「異化」の両作用が駆使されることによって進行するものと考えられる。

さて、右「同一化」と「異化」の内実を形づくるものは言うまでもなく個々の接続詞そのものである。すでに見たとおり、「累加」系内部においても「また」の勢力は「そして」に肉迫し、「逆接」系においても、例えば「だが」の勢力は「しかし」に匹敵しうる。これらは当然、それらにおける、「同一化」及び「異化」作用それ自体における相互の差異のあり方を示していると考えられるが、ここでは一例として、「逆接」系における各接続詞相互の差異を若干の用例を用いて検討してみたい。

「資料C：太」における「逆接」系接続詞は、「しかし」61例、「だが」14例、「が」4例、「しかしながら」3例が見出せる。「でも」・「けれども」等の例は見当らない。これらは当然、「使い分け」られているはずである。しかし例えば、一般に右例数のように「しかし」が圧倒的に優越している中で、左のような「だが」はいかなる理由で用いられているのであろうか。(傍線筆者。以下同様。)

ガ島に上陸した伊1潜の幹部たちは、暗号書をはじめとする機密書類の存在が気になり、三日後の夜、座礁している伊1潜の露出部に爆雷を仕掛け、爆破して撤収部隊とともにガ島を去った。

だが伊1潜は完全に破壊されてはいなかった。二月十一日、ガ島の米軍は潜水夫を使って伊1潜の艦内をくまなく搜索し、日本海軍の暗号書や機密書類をほとんど引き揚げることに成功していた。(186)

右の例でもし当該部分が空欄とされたら、「しかし」を入れるべきか「だが」を入れるべきか迷わざるを得ないであろう。しかし著者は厳然と「だが」を用いているのであるから、当然その然るべき理由がなければならない。そこで本資料で、「だが」の現れる14例を検討してみると、(1)同一節内の前方・後方に「しかし」が併用されている場合が多い。(前方7例、後方1例。)(2)前の文が「た」・「である」で終わっている場合が多い。(「た」は実際は過去形「だった」3例、「のだ」2例、「である」1例。)(3)段落内部に置かれることの方がその冒頭に置かれる場合より多い。(前者8例、後者6例。)等の現象が見出される。このうち、(1)と(3)の現象にさらに注目してみると、(1)の条件を備えた「だが」計8例は、(3)の観点より見ると、段落冒頭に置かれたもの2例、段落内部に置かれたもの6例で、(3)の一般的傾向に比べ、明らかに段落内部の位置に置かれる傾向が顕著となっている。左に一例を示そう。(原文の振り仮名は略す。以下同様。)

さて、天皇の宣戦布告の詔書は、その石油がほしいという気持ちを「自存自衛のため決然起つて」と表現している。だが、「大東亜共栄圏建設のため」というそのものズバリの表現はない。

しかし、戦争の名前を「大東亜戦争」としたこともあつて、大東亜共栄圏の建設こそが戦争目的であり、それが天皇の御稜威（御威光、御威勢）を広げることであり、それが日本人の使命であると、誰もが強調した。日本が新たに占領した地域はすべて米・英・蘭（オランダ）の植民地だったので、日本による占領はアジアの解放である。と強弁しても、実態が客観的に報道されたわけではないから、日本国内では通用したのである。(34)

右のような傾向を踏まえ、ここでそもそも「しかし」・「が」・「しかしながら」のような、本資料に現れる「逆接」系接続詞の段落における出現位置（その冒頭か、乃至その内部か）をすべて調べてみると次のような結果が得られた。やや出来過ぎのようであるが、「しかし」は段落冒頭36例、同内部27例、「だが」は先述のとおり6例対8例、「しかしながら」は3例対0例、「が」は0例対4例である。すなわち、「しかし」と「だが」はちょうど正反対のような比率で段落冒頭と内部を占め、「しかしながら」はすべて冒頭、「が」はすべて内部に置かれている。後二者の例を一つずつ挙げておこう。（後例は同一段落中に「しかし」を含んでいる。）

インパール作戦を言いだしたのは第一五軍司令官の牟田口廉也中将だが、その参謀長・小畑信良少将は補給不可能を理由に反対した。牟田口は小畑参謀長を更迭して、インパール作戦を上級司令部に認めさせるべく強力に働きかけた。

しかしながら、牟田口の下にある三人の師団長のうち二人は明確に反対だったし、一人は懐疑的だった。(200)

ガダルカナル島に上陸した米海兵隊は一万七〇〇〇人だった。その他の部隊を入れると約二万の大部隊である。が、ガ島奪還をめざす日本軍の推定では約二〇〇〇〇人だった。現地の参謀で最も多く見積もった者でも七、八〇〇〇人だった。しかし、東京の大本営海軍部情報部は海兵一個師団（兵力約一万五〇〇〇人）と正確に判断していた。(108)

右のような結果は全くの偶然とも思われない。全く対蹠的性格の「資料D・イ」では、「しかし」33例、「が」15例、「けれども」9例、「でも」4例で、逆に「だが」・「しかしながら」の例皆無であるが、右「しかし」以下の段落冒頭対内部の位置比率を見ると各々、10対23、3対12、2対

7、0対4で、やはり「しかし」が「が」に対して冒頭に置かれる比率は高い。結局、もし段落自体がひとつの大きなまとまりをなし、その冒頭の位置が相対的に強烈な異化⇨転換を指示するのにふさわしい位置だとするならば、その位置を相対的に多く占める「しかし」は、「しかしながら」とともに、「だが」・「が」等に対し総体的に大きな異化⇨転換の意図を示しうるものと解さざるを得ない。勿論これは主体⇨著者の相対的意図⇨姿勢が根本的に左右すべきものとして、必ずしも表面的文脈から他者が自動的にそれらの選択を云々すべきものではないという点において、先述空欄補充の困難性が生じうるのであるが、右のような検討はこれら「逆接」系接続詞間にかかる「異化」の度合の調整に関わる差異を（勿論いわゆる文体的硬さ、すなわち「しかしながら」・「だが」と「けれども」・「でも」の対立のごときをも含めて）見ざるを得ないように考えられる。「異化」に限らず「同一化」においても、当然、たとえば、「そして」と「また」の間に存すべき差異が、必ずしも「異化」の場合のような「度合」にかかわるものとしてではなく（そもそも「同一化」の「度合」という自体矛盾的概念のように見える。）考えられなければならない（たとえば、一方を基本的に「時間」性にかかわるものとして、一方を「空間」性にかかわるものとして）であろうが、それへの言及は後述、乃至他の機会に譲り、次に接続詞と接続助詞との異同という、きわめて「厄介」な問題の検討に移ることにしたい。

V

そもそも接続詞は一体何のために用いられるのか。用いなくても「通じる」ではないか、あるいは（通じないのなら）接続助詞を用いなければならないか、というような疑問がありうるとしたら、これらに対する答えはいかにあるべきなのであろうか、ということが本節での課題である。

右「疑問」は勿論、ひとつの「暴論」である。接続詞は文章に必要な「展開」を与えるし、接続助詞が必ずしも接続詞に代替できるものでもない、というような自明の理はそれとして、しかしやはり、この「暴論」的「疑問」は、一見省略可能なような「そして」や、一見接続助詞に置き換え可能なような「しかし」の存在すべき必然性を問うためのひとつの意義を有しうるであろう。

さて、「そして」に関連していえば、文章ではきわめて多数の連用形による接続が見られ、（これは零記号の辞としても解しうる。）「しかし」と関連しては、「が」の多用が注目される。実際、例えば「資料C…太」（ここでは第三章と第七章。全体の約半分。）においては、接続助詞「が」が105例を擁して断然多く、以下「ので」20例、「から」15例、「と」12例、「ば」8例、「なら」2例、「たら」2例等と続く。「ので」・「から」の「因果」系が計35例、「仮定（条件）」系が計24例とすれば、ひとつの特徴ある接続助詞出現⇨使用のパターンが窺えよう。勿論、同資料には「因果」系接続詞として「だから」13例が見えるから「因果」表現を接続助詞のみが担当しているのではないし、逆に「逆接」系の接続助詞も皆無ではない（「ものの」3例、「のに」2例他等）が、「仮定」系の接続詞がきわめて少ない点（「そうすれば」2例、「ならば」1例等）を鑑るとき、

「逆接」及び「非逆接」の両機能を有する「が」がこのように多用されうることはきわめて興味深い。いつたい、「が」は次のように決して接続詞に置き換え得ない用法を有し、しかもこれが多用される。

そのヘイスティングズだが、小学館『日本百科大全书』によれば、「カリ」を一七七二年に持ち帰ったとある。総督に就く以前ということになる。「資料A…カ」(47)

最後に、そもそも艦攻の雷爆転換に2時間も3時間もかかっていたのだが、これは多分に、海軍航空本部の主流派、たとえば大西瀧治郎らのせいなのである。(『日本海軍の爆弾』兵頭二十八、四谷ラウンド、一九九九年五月、(60))

そもそも接続詞「が」は必ず「逆接」のみを示し、右接続助詞「が」の示すような機能、話題を持ち出し、これを後続(主)文に接続するという機能は有していない。そしてここにこそ、接続助詞「が」の順・逆(接)を問わず前件(文)と後件(文)を「一体化」し、全体をひとつの複文として形成するという本質と、接続詞「が」の然らざる本質(「逆接」のみに限定される)との差異が如実に現わされていよう。接続助詞は前後を「一体化」し、全体をひとつの(無時間的)まとまりへと統合するためのものなのに対し、接続詞は前後を「分離」・「独立」せしめ、以て文章に「展開」を与え、その「進行」のためのスピードを賦与するものと考えられる。広義の「仮定」(「条件」系)の表現、または動作の平行(「ながら」)を示すのに接続詞より接続助詞が圧倒的に多く用いられ、また「因果」系においても同様の傾向が示されるのは、これらの表現自体がそもそも、前―後件の密接不可分な一体的関係を含蓄し、したがってその関係表示が接続詞よりもより接続助詞に委ねられ易いであろうということからその理由が説明されよう。ここから考えると、たとえば「ので」と「から」の違いのようなもの自体が接続詞によつては区別しがたく、専ら「だから」一本になり易いことも理解に難くない。これらの差異はそれ自体、前―後件の密接・不可分な関係性自体内部に生じる差異と考えられるからである。同様にして、接続助詞の接続のしかたは先行文末の形態により厳格に規定されているが、逆に、接続詞には当然、かかる制約はなく、したがって、左のような用法も可能となる。

これは断言するものではないが、ある史料で、魚雷にとりつける前の「爆発尖」が、敵の攻撃による衝撃に敏感に反応し、小型爆弾のように爆発して破片を飛び散らせたという記述を読んだ覚えがある。

とすれば、この爆発尖を装着した魚雷は、『大和』戦闘詳報のようなスプリンターを浴びれば、ひとたまりもなく誘爆したであろう。(前掲)

右の「とすれば」は決して前段落末尾に直接続いているのではなく、むしろその「内容」|| 「破片を云々」という事柄に対するものであることは明らかである。ここを何らかの接続助詞に置き換えることはできない。これと異なるケース、

(中略) 日米開戦までは魚雷の需要がほとんどなかったことを考えると、このような古い魚雷用炸薬がまた入れられたままだったということも、考えられなくもない。

しかし、より可能性の大きいのは、爆発尖(爆弾の信管に相当する部品)の構造が、被弾に対してあまりに完全性の低い構造だったことだろう。(前掲60)

右では「しかし」を「が」に置き換えれば直ちに前段落末に接続し得、全体を長い複文に変更しようと思えばできる。ここでそうなされていないのは、先述、「しかし」によって大なる「転換」性を与えたいという意図と、複文としてひとつにせず分離・独立化して進行を促さんとする意図とを主体||著者が有していたためであろう。

本節の最後に、先述、(ある種の)条件系・動作平行系の接続助詞の使用がむしろ「が」より卓越する例(||「資料E:イ」)を挙げ、その一部(冒頭より23頁まで。第1章分。全8章)における実状を見ることとしたい。ここでは「が」5例に対し、「と」12例、「ながら」11例、「ば」4例、「なら」2例、「たら」2例等が見え、先述「資料C:太」と異なり、「と」と「ながら」の卓越が印象深い。これは無論、先述のように本資料の性格(||紀行文としての自然情景描写に富む)によるものと思しい。これらの「と」はたとえば「すると」に無理矢理置き換えることも全く不可能ではない場合もあるが、勿論そうでない場合も多い。左にその二例ずつを掲げよう。

ハイブッシュクランベリーの灌木を分け入ると、夏草の匂いがした。ヤナギランがピンクの花を咲かせている。ゴゼンタチバナが白い花をいっぱい広げている。(9)

倒木の上に腰かけ、しばらくぼんやりしていると、何だかうれしくなってきた。(10)



右は置き換え「可能」な例。いずれもいわゆる「事実文」の「と」である。

黒々として、空に突きささるように立つシロトウヒの針葉樹が僕は好きだ。そこに、アスペンやシラカバが混じっていると何かホツとする。さらさらと風に揺れる葉音。女性的な木だが、秋の黄葉がすばらしい。(9)

(中略) このうまく説明のできない気持ちが広がっていると、僕はいつも一気に走ってしまう。おまけに、夏の夕暮れの、ゆるやかな風が頬を撫でている。(10)

右は「すると」に置き換え得ない「仮定」的性格の「と」である。ある種の文体・話題においては右のように「と」(や「ながら」)が「が」より多用される場合も当然あり得よう。

## VI

本稿でここまでに触れていないのは、Iで挙げた五点のうち2と5、すなわち「零」||接続詞不使用の場合と副詞との差異の二点である。接続詞をわざわざ用いずとも「通じ」そんな場合は確かにありうるであろう。

川沿いを離れ、再び森の中を進むことにした。滝の音が引いてゆくと、森の静けさにホツとする。けれども、今、この森の中はクマの世界なのだ。あたりに気を配りながら慎重に進むが、リンは銃を持っていない。そのことが何か嬉しかった。森の様相はいよいよ吾むし、地表はこれまで以上の倒木で覆われてきた。

少し身をかがめ、目をこらせば、森のカーペットは十センチ程のトウヒの幼木に満ちている。だが、その最初の一年目が、多くの場合最後の年なのだ。森の暗さは、日蔭を好む藓類には都合が良いが、多くの低木の生長には障害である。そしてトウヒの種子さえ、地表に落ちて発芽しても藓類にからまれて苗木以上に伸びることが難しい。それだけではない。絶えず落ち続けるトウヒの針葉は、土壌を自らの苗木にとつて不適な酸性につくりあげてしまう。

しかし、その酸性土壌を辛抱強くじっと待ち続けているものがある。それがツガだ。その幼木は酸性土壌に強く、トウヒのつくる日蔭でも

しっかりと生きてゆく。つまり、今全盛のトウヒの森は、自ら不都合な土壌をつくりあげながら、次の森の時代をゆっくりとツガに明け渡そうとしているのである。振り返れば、それは遙かな昔、ハンノキがトウヒにしてあげたことなのだ。いつの日か南東アラスカがツガに覆われる時、森の一生はクライマックスを迎えることになる。(資料E・イ133~134)

右三つ分の段落の中に、傍線のように接続詞5例(及び、接続助詞7例)が含まれている。出現順に「けれども」・「だが」・「そして」・「しかし」・「つまり」であるが、著者の文体意図をしばらく度外視して、このうち絶対に該接続詞が存しなければ意味Ⅱ文脈不明となるものはどれであろうか。逆に言えば、無くて済むものはどれであろうか、というように考えると、やや驚くべきことだが、実はすべて無理に略そうとすれば略しうると考えざるを得ないのである。勿論、前後の関係の主体Ⅱ著者による明示的定位は喪われてしまうから、たとえば一番目の「けれども」の示す主体の意図はまず伝わらなくなる。しかし他はどうか。「そして」と「つまり」はほぼそのような関係のように推測され、読解されうるのではないか。「だが」と「しかし」は、むしろ「そして」のように解される可能性が出てこよう。「順接」・「逆接」の概念の不分明さがむしろ示唆される。先の「けれども」も、実はこの点にかかわるものとするならば、当初指摘した、各種の性格を異にする資料間において、共通して、「しかし」と「そして」の卓越の現象が見られるのは、実はこの点に起因しているのかもしれないと考えられる。しかしもし、この点をさらに度外視すれば(Ⅱ読者の自由に委ねれば)、実は、逆に、これら接続詞の欠如が文脈の絶対的不通性を招くものでないという結論に達せざるを得ない。すなわち、接続詞は、主体がその関係づけの明示的定位をまさに主体自らとして導くことを示さんのために用いられているかのようなのである。逆にいえば、純粋に外的条件Ⅱ内容の展開のみに文脈を委ねようとするれば接続詞の使用は「余剰」的なものとなる可能性が示唆されるのである。すなわち、接続詞が基本的に主体の主体的意図による独立内容相互の関係づけに供されるものとするならば、先述接続助詞はそれら独立内容内部の、「内部内容」とでもいうべき一部分に、総陳述(Ⅱ最終・文末陳述)へと向かう途次においてかかわるものとして位置づけられよう。(複文の途中で「それは可能だが、しかしあまりうまい方法ではない。」のように用いられる場合は右二者の中間的機能を果たしているものと考えられる。)右をさらに言い換えると、接続詞は主体により方向づけられた進行を司り、接続助詞は(接続詞によって方向づけられる)各独立内容(Ⅱ文)内部での一体化された整序を担当するものと考えられよう。一般に文章の主体はこの両種をその性格に応じつつ駆使して「文章の戦略」をダイナミックに組み立て、最も効果的な主体的制御の(読者への)呈示に腐心しているものと思われる。(勿論かかる「戦略」の実行手段はこれのみに止まるものではない。他の代表的なものの例としては「指示詞」(Ⅱ「こ」・「そ」・「あ」の使い分け)が直ちに想到されるが、これはすでに本稿の範囲外として別稿を期したい。)実は接続詞と副詞の差異の問題も、右のような視角と無縁ではあるまい。明らかに先行の(他の)事象と関係のあ

る副詞は多い。「やはり」・「さらに」・「結局」・「実際」等が副詞だというなら、それらと「そして」・「また」・「かつ」等との差異は、前者における先行（別）事象と当該文との関係が主体（Ⅱ話し手）内部においてのみ意識されている（Ⅱ主体の「内部」にある）根拠に基づくとされるべきものか、あるいは述語のみ関係するかであるのに対し、後者においてはその関係が主体内部にのみ存するのではなく、主体から独立した外部事象として誰の目にも対象化してとらえられるべき（Ⅱ主体の「外部」にある）事象相互のそれとして考えられるという点に求めざるを得ないだろう。（勿論、「また」のように一語で副詞にも接続詞にも用いうる場合もありうる。）結局、「対象」と「主体」との関わり方、そしてその相互の種々の性質、種々の問題は常にこの点を意識せざるを得ないということ、右もまた示しているかのようである。

#### 注

- (1) 塚原鉄雄「連接の論理―接続詞と接続助詞―」、「月刊文法」2巻2号、一九六九年一二月、明治書院、の用語による。
- (2) 同右。
- (3) 同右。
- (4) 同右。
- (5) 塚原鉄雄「接続詞―その機能の特殊性―」、「月刊文法」2巻12号、一九七〇年一〇月、明治書院、参照。